

# 詩人モリスの作詩法

## *Love Is Enough* を題材に

関 良子

シンポジウム第2部門「詩人ウィリアム・モリスを読み直す」では、今日では装飾デザイナーとして知られる Morris が、同時代には第一に詩人として名が知られていた事実に着目し、詩人モリスの再検討を行なった。私の報告では、多作の詩人であった Morris の作詩法に注目し、とりわけ円熟期の作品でありながら、今日では読まれることの少ない劇詩 *Love Is Enough* (1872) の分析を行なった。

### 詩人 Morris への同時代的評価、および詩作手順についての証言

Lafcadio Hearn は “[Morris] wrote in verse on a scale that astonishes, a scale exceeding that of any modern poet. [...] But [His production] is good as to form, good as to feeling” (265–66) と評している。つまり、多作の詩人でありながら、詩形の調子が良いこと、感情表現が良いことを評価している。このような評価は同時代の文人の間で共有されていたようで、Edmund Clarence Stedman も同様の評価を下し、“we feel that he has a too facile power, – a story once given him, – of putting it into rippling verse as rapidly as another man can write it in prose” (377) と述べている。この指摘にあるように、Morris が散文を書くのと同じくらい容易に詩行を書けたことは、彼の友人や家族の証言にも裏付けられており、娘 May Morris は “Morris’s published work usually reads as though it had flown off the pen almost unconsciously, with such ease does it run. And indeed in most cases it was so [...]” (1: 374) と述べている。

Morris の詩作手順に関する家族や友人の証言としてもう一つ重要なのは、彼が出版前によく詩を朗読して聞かせていた点である。例えば Burne-Jones の遠縁の親戚であった Kipling は、子どもの頃に Morris 小父さんの物語りに惹き込まれたと回想する (MacCarthy 399)。娘 May も *Love is Enough* 創作期のことを回想し、静かな夜にその中の抒情詩 “Music” が朗読されたときに、その美しさに心奪われたと述べている (1: 443)。G. B. Shaw もまた、Morris が大きな体を「象のように揺さぶりながら」詩を朗読していたと証言している (M. Morris 2: xxxvii)。

### Morris の詩の聴覚的効果

上記のように、Morris は詩作において朗読を重要視している。その要因もあって、詩人 Morris の作品は詩形の種類に富むという特徴がある。ここでは *Love Is Enough* を題材として、Morris の詩形の特徴を確認したい。

*Love Is Enough* の一番の特徴は、一つの作品に様々な詩形が使われている点にある。まず、冒頭に登場する農民夫婦 Giles と Joan の台詞には 8 音節の rhyming couplets が用いられ、素朴ながら力強い民話的雰囲気がある。次の登場人物 Emperor と Empress の quatrain または couplet で構成された会話は iambic pentameter のリズムで、農民夫婦の会話よりも少し高尚さが演出される。また、二人の会話の中で脚韻と繰返しを編みこむように織り交ぜることで、結婚したばかりの二人の仲睦まじい様子を窺わせる。*Love Is Enough* では愛神 Love が各場面冒頭で口上を述べるが、そこでは一貫して heroic couplet を用いることで Love の発言に威厳を持たせている。

本編の劇中劇 *Of Pharamond the Freed* では、中世の時代の詩を再現した頭韻詩 (4 強拍で頭韻があり、行中休止がある詩形) が採用されている。Morris の詩は 1 行が長い場合であっても行中休止が挟まれることが多く、それによってスピード感のある語りが可能になり、長編詩であっても読み手への負担が軽減される。そのことが、冒頭に挙げた Hearn による Morris の詩の形式・感情表現への高評価に繋がったと言える。また、この効果により、Morris の詩は長編であるにも関わらず、19 世紀当時に人気を集めたのではないかと考えられる。

本編の劇中劇の頭韻詩と並んで *Love Is Enough* の中で特に韻律に工夫が成されているのが、“The Music” の箇所である。この作品には合計 8 回 “The Music” という叙情詩が挟まれる。詩行の長さや脚韻のパターンは様々だが、全ての詩で dactyl と anapest を併用したリズムが採用され、多くの脚韻が二重押韻になっている。これが、May Morris が “long swinging lines” (W. Morris 9: xvi–xvii) と呼んだ聴覚的効果をもたらしている。

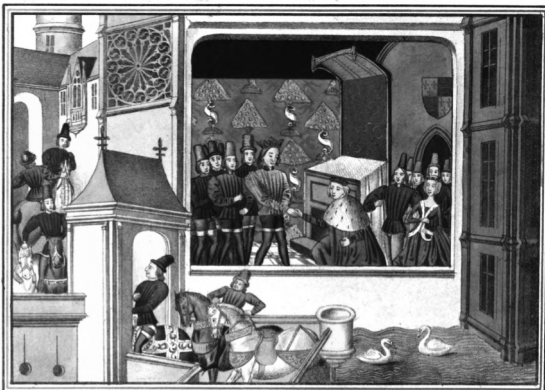
このように *Love Is Enough* には Morris の詩形へのこだわりがよく現れているが、出版当初の書評が注目したのも詩形の美しさだった。例えば出版のわずか 3 日後に出された *Athenaeum* の書評は、頭韻詩の使用法を絶賛し、「ここで使われる中世由来の頭韻詩でこそ Homer を英国の土地に馴染むように翻訳できる」と、更には「Morris は頭韻詩の形式で、もう一度アーサー王伝説のテーマに取り組むべきだ」と述べている (658)。Sidney Lanier は、Anglo-Saxon 由来の詩形は iambic ではなく dactyl や anapest といった 3 拍子のリズムであると主張し (142)、*Love Is Enough* 内の叙情詩 “The Music” はそれをうまく再現した例であると論じている (158)。

## Morris の詩の視覚的効果

作詩法とは、狭い意味では prosody つまり前節で分析したように、韻律をどのように整えるかを指すが、Morris の作詩法を考える際には音・韻律のみに注目する訳にはいかない。今回のシンポジウムの他3名の報告にも見られたように Morris の詩は常に読み手・聞き手に「見る」ことを促すという点で、視覚的効果も有するのだ。Love Is Enough でも、婚姻パレードを見物する Giles と Joan は皇帝夫婦の身体を観察している。更に劇中劇 Of Pharamond the Freed が婚姻祝賀に上演されるという、何重もの枠構造になっていることから、見る行為が幾重にも繰り返される。また、視覚は作品世界内だけでなく、創作過程においても重要な要素であった。

Morris は前作 *The Earthly Paradise* (1868–70) 同様、*Love Is Enough* を挿絵入りで刊行しようと計画していた。前者は木版画入りで刊行しようと計画していたが結局は活字のみでの出版となり、後者は彩色金付け入りでの刊行を試み、装丁こそアーツ&クラフツ精神の光った美しいものに仕上がるが、同じく活字のみの出版となる。ここで注目したいのは、Morris が書齋で詩作に勤しんでいたのではなく、常に工芸の仕事が側にあるところで取り組んでいたという点である。そして、このような環境で詩作をしていたことにより、Morris の詩に聴覚的効果だけでなく、視覚的効果が生まれたのだと考えられる。

Morris が挿絵入り本製作のために参考にしていた本の一つに、H. N. Humphrey による *Illuminated Illustrations of Froissart* がある。この資料が 1870 年代の Morris のテキスタイルデザインに影響を与えたであろうことは、美学研究の分野で既に指摘されているが、Froissart の彩色写本は *Love Is Enough* の詩作にも影響を与えていたと思われる。この彩色写本にはパジェントや余興の様子を描く絵もいくつかあり、*Love Is Enough* の作品世界を想起させるが、特に興味深いのが【図】に挙げた挿絵である。これは Richard II と Gloucester 公の会談の様子を描いたものだが、この絵では建物の壁の一部を取り除くことで、城の中にいる Richard II、Gloucester 公とそれぞれの召使いたちの様子と、城の外で待つ馬番や侍者の様子を、同時に見る事が可能となっている。



【図】 (Humphrey, Plate XVIII)

既述のように *Love Is Enough* は、農民夫婦の Giles と Joan が婚姻パレードを見物し、皇帝夫妻が *Of Pharamond the Freed* の劇を見物するという、入り組んだ枠構造の物語になっている。この複雑な構造にしたために、Morris は執筆に苦労したようなのだが、それでもこれを劇詩に仕上げることにこだわったという (MacCarthy 325)。そのこだわりの裏には、聴覚的な面で中世の頭韻詩を再現するだけでなく、Froissart の彩色写本にあるような中世世界を、視覚的にも再現したいという Morris の思いがあったと考えられる。

もし作品が劇中劇の内容だけにして単純化された場合、物語は一人の王が夢に見た恋人を探しに王国を捨て「愛さえあればそれで良い」と悟ったという個人的な物語に終わってしまう。

しかし、その物語を庶民の役者が演じ、皇帝夫妻がその劇を見物し、更には農民夫婦の Giles と Joan が婚姻祝賀の様子を見物することで、この物語が個人的な物語ではなく、一つの社会の物語となっているのだ。

*Love Is Enough* は、出版当時の批評家が評価したとおりに多様な韻律を使って英詩の可能性を広げただけでなく、その後の Morris の文学作品に見られる、社会や fellowship に関わるテーマを含んでいる。その意味で、今日では読まれることの少ない作品ではあるが、Morris の思想を考える上で重要な作品だと言える。

## Works Cited

- Hearn, Lafcadio. *Pre-Raphaelite and Other Poets: Lectures*. Edited by John Erskine. Dodd, Mead and Company, 1922.  
Humphrey, H.N. *Illuminated Illustrations of Froissart: Selected from the MS. in the British Museum*. William Smith, 1845.  
Lanier, Sidney. *The Science of English Verse*. Charles Scribner's Sons, 1880.  
MacCarthy, Fiona. *William Morris: A Life for Our Time*. Faber and Faber, 1994.  
Morris, May. *William Morris: Artist Writer Socialist*. 2 vols. 1936. Edition Synapse, 2005.  
Morris, William. *The Collected Works of William Morris*. Edited by May Morris, 24 vols. Longmans Green, 1910-1915.  
Review of *Love is Enough*, by William Morris. *Athenaeum*, no.2352, 23 Nov. 1872, pp. 657–58.  
Stedman, Edmund Clarence. *Victorian Poets*. J. R. Osgood, 1876.

\* 本発表は、以下2つの科学研究費補助研究の研究成果報告の一部である：若手研究 B (課題番号 26770102) 基盤研究 C (課題番号 19K00394)